

鹿児島医セン

連携室だより

2007.5 No.14

鹿児島医療センター（循環器・がん専門施設）

研修医募集について

当院は、昨年4月より病院名を鹿児島医療センターと変更し、循環器、脳卒中に加えてがんの拠点病院として新たに出発しました。

診療科は循環器内科、小児科、心臓血管外科の他、血液内科、脳血管内科、脳神経外科、消化器内科、外科、泌尿器科、産婦人科、耳鼻咽喉科、放射線科、糖尿病・内分泌科、麻酔科、リハビリテーション科です。二次、三次医療を昼夜を問わず行っています。ベッド数は366床で、うち循環器系150床、脳卒中50床、がん150床です。ここ20年に亘るPCIや開心術は増加傾向にあります。16床のICUと3床のSCU(脳卒中)がフル稼働しています。

新研修医制度が始まって早や3年目を迎えましたが、この間初期臨床研修を当院の管理型で研修された先生方は、今年度4月から始められた3人を含めて合計11名です。出身大学は、鹿児島大学4名、金沢医科大学1名、島根大学1名、宮崎大学1名、高知大学1名、産業医科大学1名、福岡大学1名、兵庫医大1名です。また、鹿児島大学からの協力型で来られた先生方は今年度を入れて合計12名です。今年度初期研修はこの4月から始まったばかりで、当院管理型に属する3人と鹿児島大学に属する2人の研修医の計5人が勉強しています。

当院は長い歴史を持つ病院ですが、研修医教育に対する歴史は浅く、当院が現在初期研修を行っている事実も広く知られていないように思われます。たくさんの患者さんが受診し、治療が行なわれている当病院は、初期研修を行うに十分な内容があり、また我々もその期待に応える義務があると考えております。当院では新研修医制度の発足を受けて、3年前より5名の委員によって構成される研修医教育委員会を定期的に主催し、研修内容の充実を計ろうとしています。その中で、医師側と研修医との接触面積の拡大を図る一方で、どのようにしたら確実な医療技術と姿勢をはぐくむことができるか、どのようにして安全管理を学んでゆくか、どうしたら他職種との関係をうまく築くことができるか、などのことをテーマにカリキュラム内容を構築しているところです。ソフ

トの他ハードの充実も必要で、図書館や手技実習などの充実もめざしておりますが、この4月には念願の新しく研修医宿舎も完成しました(写真)。研修医たちは宿舎の隣がICU棟であることに苦笑いしておりますが、医師としての勉強の出発にあたり、患者さんのそばに寝泊りすることは、彼らの将来にきっと何かをもたらしてくれると思います。鹿児島医療センターの初期研修医制度に対し、何卒宜しくご支援の程お願い申し上げます。

循環器科部長 皆越 眞一

写真



診療科紹介

消化器内科

平成18年4月から、藤島弘光(医長)、坪内直子(医師)が赴任し、レジデント2名を加えて、計4名の体制で診療を行っています。

藤島の専門分野は、消化器がん化学療法であり、胃癌、大腸癌、食道癌などの化学療法の患者さんが増えています。平成18年8月に、当院が鹿児島大学病院とともに地域がん診療連携拠点病院に認められましたので、今後も消化器がん患者の増加が予想されます。切除不能大腸癌の標準的化学療法としては、FOLFIRI療法、FOLFOX療法、IFL療法などがありますが、本邦での臨床試験でのエビデンスはまだ少ないのが現状です。本邦でのよりよい治療法のエビデンスを作るため、当科では多施設共同の臨床試験にも参加しており、適応症例で患者さんの同意が得られる場合は、臨床試験に登録して治療をおこなっています。臨床試験の場合も臨床実地の症例の場合も、きちんと治療効果および副作用を評価しながら治療を進めています。

現在進行中の臨床試験は以下の三つです。

1. 進行・再発結腸・直腸癌(初回治療例)に対する、CPT-11/TS-1併用第2相臨床試験
(九州がんセンターなどを含む多施設共同)
2. 切除不能大腸癌の二次治療例に対するCPT-11+5FU+LV(FOLFIRI)療法とCPT-11+TS-1(IRIS)療法との第3相臨床試験
(国立がんセンター中央病院を含む全国40施設との共同臨床試験)
3. 進行・再発胃癌に対するTS-1+CDDP併用化学療法の第2相臨床試験
(九州がんセンターなどを含む多施設共同)

胃癌、大腸癌においては、ここ10年間で、TS-1、タキサン系、CPT-11(イリノテカン)、オキサリプラチンなどの有用な新規抗がん剤も増え、生存期間の延長などの進歩がみられています。手術不能な進行、再発消化器がんでは化学療法を希望される患者さんがおられましたら、ご紹介頂けると幸いです。

坪内は、県内では実施可能な施設が少ない二重バルーン小腸内視鏡検査も積極的に行っており、出血部位不明の消化管出血(上部および大腸内視鏡検査で出血源不明)の症例や小腸疾患の診断および治療に威力を発揮しています。当院は、虚血性心疾患や



脳血管障害で抗血栓薬を内服している患者さんが多くおられますが、抗血栓薬としてバイアスピリンを長期内服している患者さんで出血部位不明の消化管出血を来した場合には、小腸内視鏡検査をおこなったところ、小腸にびらんや潰瘍を認めて出血源が判明したケースもありました。小腸内視鏡検査の依頼の場合は、坪内の方まで御連絡をお願いいたします。

平成18年4月以降、腹部エコー、上部内視鏡、下部内視鏡検査は毎日行っておりますが、原則予約制にしていますので、消化器内科外来まで電話で事前予約して頂けると幸いです。平成19年4月からは、経鼻内視鏡のファイバースコープ(オリンパス GIF-XP260N: 細径5.2mm)も導入しております。従来の経口アプローチでの胃内視鏡検査で嘔吐反射が強く苦痛であった患者さんは、経鼻内視鏡で検査することにより、ファイバースコープが舌根部に触れないため、嘔吐反射がなくなり苦痛なく検査を受けることが可能です。

鹿児島医療センター(循環器・がん専門施設)において、当科の主な役割としては、がん系診療科として消化器がんの検査、化学療法(抗がん剤治療)を適切におこなうこと、および院内および院外からの消化器症状を訴える患者さんの診療(検査、治療)をおこなうことと考えています。現在、平均約20名の入院患者さんがおられますが、そのうち約7割が消化器がんの患者さんです。良質な医療を提供できるように、これからも日々努力していきたく思いますので宜しくお願いいたします。

新new任 紹face介



副院長

やました まさふみ
山下 正文

4月1日付けで牧野前副院長のあとに副院長職を拝命しました。当センターは本年度より病棟をフルオープンし、SCUの新設、ICU後方病棟の3人夜勤などより多くの二次、三次救急患者を受け入れられる様体制を整えました。地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院としてますます皆様に利用いただけるよう中村院長を補佐して努力していきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひ致します。



統括診療部長

はなだ しゅういち
花田 修一

平成19年4月より統括診療部長を務めさせていただくことになりました。院内整備も平成18年度で終了し、19年4月からフル稼働体制(18年度は316床、4月以降許可病床370床・ICU16床稼働で実働366床)となっています。ICUの後方ベッドや、SCU(脳卒中集中治療室)も整備され、循環器系や脳卒中の急患受け入れもスムーズにできるかと思ひます。また癌系診療科につきましても、ベッドの余裕が出てまいりました。病院全体として今まで以上に患者さんや、医師会の先生方のご期待にお応えしていけるよう努力して参ります。どうぞよろしくお願ひ致します。



外科部長

みやざき としあき
宮崎 俊明

昭和48年に鹿児島大学を卒業し、第2外科に入室しました。心臓グループにて臨床研究を行いながら、鹿児島通信病院外科にて約3年半、一般外科の診療に従事しました。その後、1年間の第2外科助手を経て、8年間、県立宮崎病院外科に勤務し、平成5年より当院で心臓血管外科以外の外科的疾患の診療に従事しています。当院での勤務も15年目となりますが、この間、患者さんの紹介等、皆様には大変お世話になり、感謝申し上げます。当院の特徴は、心大血管疾患の並存例や術後の症例、脳血管疾患の並存例や、最近では血液疾患の並存例の多いことです。他科と協しながら、診察に当たっています。火、木が外来診察日ですが、私まで直接、ご連絡いただければ対処致しますので、今後共、宜しくお願ひいたします。



小児科部長

よしなが まさお
吉永 正夫

4月より小児科部長を拝命致しました。小児科は循環器外来を中心に小児科医3人で診療を行っています。入院に関しては肺炎等の感染症や喘息などに対応していましたが、昨年秋以来満床に近い状態が続ぎ、紹介して下さる先生方に御迷惑をおかけしてまいりました。4月に新しく病棟が一つ開棟し余裕ができています。また御紹介よろしくお願ひ申し上げます。個人的には、院内のインフェクションコントロールチーム(ICT)活動の充実、臨床研究の推進、コメディカルの皆さんの研究発表の場の拡大を目指して行きたいと考えています。よろしくお願ひ申し上げます。



附属鹿児島看護副学校長

おちあい まきこ
落合 眞喜子

この度、4年9月ぶり再度の赴任となりました。この期間に病院・学校は、独立行政法人化へ、名称も鹿児島医療センターへ、また病院はリニューアルしており、その変化に驚いています。これからは安全安心志向への変化は社会から求め続けられるものと考えます。看護教育もカリキュラム改正の動きが控えています。質を保証し、安全安心な看護が実践できる看護者の育成に微力ながら看護教育の分野で努めて参ります。看護の実践教育は教育に多くの皆様の協力が必要となっています。特に臨地実習では地域の病院、施設に大変なご尽力とご協力を賜っております。質を保証した看護が提供できる看護師教育をめざし、地域の医療供給体制も視野にいれつつ看護教育にあたって行きたいと考えております。ご協力ご指導よろしくお願ひ申し上げます。



事務部長

まつもと きょういち
松本 恭一

4月から鹿児島医療センターの事務部長として勤務しています松本恭一と申します。生まれも育ちも肥後熊本です。鹿児島の良いところ(人情・自然)を吸収するためいろんな場所を見て歩きたいと思っています。当院の「連携室だより」は、毎月発行されている様で心強く思っています。「連携室だより」が当院からの一方通行とならないように、連携医の皆様からの投稿をお寄せ頂き、先生方の顔が見える関係を築く事が出来ればと思っています。今後ともご指導の程宜しくお願ひ致します。

登録医医療機関紹介のコーナーを始めました

掲載希望の医療機関はご連絡下さい。

登録医医療機関紹介 第2回

山下わたる内科

当院は平成4年3月に人工透析施設を持った病床数19の内科診療所として開院致しました。当院からは正面に桜島を展望でき、近くにはサティや大型電器店やスポーツクラブも在ります。国道10号線バイパスが開通してから当院へのアクセスも便利になり、周囲はアメニティの高い環境となっています。平成9年5月腎センターを増設し、平成15年夏には庭園が完成し、緑の多い優しい環境の整った診療所になりました。広大な庭園では四季折々の花が患者さんや家族の心を癒し、またウォーキングなどの運動療法にも利用されています。当院のスタッフは院長をはじめ医師3名、看護師20名、透析技師2名、栄養士1名、事務4名、その他11名の計41名の職員からなります。患者さんの多くは慢性腎臓病をお持ちの方ですが、外来には糖尿病・高血圧など成人病で通院されている方も多く見られます。慢性血液透析患者さんは週3回の通院を余儀なくされ、抑うつ症状をきたしやすいと言われております。私たちは透析患者さん

の心の負担をできるだけ軽減できるような治療法に取り組んでいます。また長期透析患者さんは心血管系の合併症をきたしやすく、心不全を起こすことも度々あります。鹿児島医療センターは当院から近く、高度医療が24時間提供されていることから連携をとらせて頂いております。今後も私たちは地域医療に貢献できるよう頑張りますので、宜しくお願い致します。

山下 亘



ひとくち診療メモ

腹部大動脈瘤について 腹部大動脈瘤は無症状のことが多く、他疾患の精査中に発見されたり、患者様自身が腹部の瘤に気付いて受診されることも多い疾患です。破裂すると激痛を生じ、ショック状態へ移行していきます。生命予後は悪く、腹部の触診は腹部大動脈瘤を発見し破裂を防ぐための第一の手段と言えます。胸部の聴診などに引き続きぜひ腹部

の触診も欠かさないで下さい。ついでに大腿動脈以下、下肢の動脈拍動も確かめてみて下さい。ASOの合併も多々あります。

定期的な手術の適応は瘤径4.5～5cm以上としています。これ以下では破裂の危険より手術の危険が大きいと考えられるからです。平均的には1年間に1～2mm増大すると言われております。手術適応の大きさになるまでの大体の目安にさせていただいて良いと思います。瘤径4.5cm以下では年に1～2回CTでフォローしていくことになります。腹部大動脈瘤の患者の30～40%に虚血性心疾患の合併がみられます。手術前にPTCAやCABGを要することもあり、注意が必要です。

定期的手術の死亡率は2%前後です。80才以上でもADLがよければ手術適応になり、成績に差はありません。破裂、特にショック状態の症例の救命率は低く、破裂前に精査して手術に臨むことが肝心です。腹部を触ってみてください。エコーなどもちょっと臍の付近に当ててみてください。動脈瘤が見つかるかもしれません。

(副院長 山下正文)

お問い合わせ先

独立行政法人
国立病院機構

鹿児島医療センター（循環器・がん専門施設）

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号
 (代)TEL 099 (223) 1151 FAX 099 (226) 9246
<http://www.kagomc.jp>
 脳卒中ホットライン ▶▶ 090-3327-5765

(地域医療連携室) 濱田、大渡、平田、中島、田添、池上、善福
 直通電話 ▶▶ 099-223-4425
 フリーダイヤル専用FAX ▶▶ 0120-334-476
 ※休日・時間外は当直者で対応します。

